

先住民族国際シンポジウム議事概要

○日 時： 平成29年11月25日（土）13時30分～16時00分

○場 所： S T Vホール（北海道札幌市）

【第1部 パネルディスカッション】

<コーディネーター>

・佐々木史郎 国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹

<パネリスト>

・ジョシュア・ファレヒナ ギズボーン地区議会議員

・ウィリアム・フラヴェル ラザフォード高校マオリ学部長

・北原次郎太 北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

・八幡巴絵 一般財団法人アイヌ民族博物館

・平井裕秀 内閣官房アイヌ総合政策室長（内閣審議官）

○パネリストからの発言要旨

（フラヴェル氏）

マオリの言語教育と文化について、ニュージーランドでは約100年前はマオリ語が第一言語だった。しかし、英国人の入植が進み、英国人の人口がマオリよりも増えたことに伴い、貿易や教育、日常生活において英語が使用され、マオリ語が軽視されるようになった。その結果、私たちは言語を失うとともに文化も失った。

1960～70年代になると、マオリの人々はオークランドなどの都会に移住し、地元を離れた生活に慣れて独自性を失い、マオリ語はほとんど話されなくなった。このため、私たちはどのようにマオリ語を復興させるか、何ができるかを考え、その方法として幼稚園から高校まで、理科や算数などをマオリ語で勉強するプログラムを作り上げた。これは、マオリ語を復興させる、という意味で非常に良い取組であった。しかし、高校でのマオリ語の履修率はまだまだ低いことから、多くのマオリがマオリ語を学ぶことができるように、家族や政府の支援も考えなくてはいけない。

今後の課題として、日常生活でのマオリ語の使用、マオリではない人々のマオリ語の普及に対する役割、学校教育でマオリ語を必須にする可能性などに取り組んでいきたい。

アイヌの人々の人口は少なく難しいかもしれないが、公的教育制度や家庭での子供への教育を進めて欲しい。

（ファレヒナ氏）

言語を失うことは文化を失うことにつながる。私が子供の頃はマオリの文化が失われ、私の家族、地域は成り立っていなかった。自分の子供たちのためにこの状況を変えたい、これが私の活動の原点である。私の子供たちにはマオリ文化、マオリ語を使って教育している。子供たちの状況を変えるには自分たちの地域を変えなければいけない。そのた

めに私は地方議員になるとともに、国レベルのマオリの組織の代表にも選出され、いろいろなプログラムを始めた。

私は地区議会の保健委員会などで仕事をしているが、健康に関する分野では、マオリ文化の知識を取り入れた健康モデルをつくろうと考えている。これは政府と一緒に進めていく必要がある。

私が所属している議会には、リーダーシップボードという委員会があり、委員の半分がマオリで構成されている。例えば、自分たちの土地にある天然資源の利用に関しては、委員会の同意が必要であり、マオリが反対と言えば議会を通すことができないため、どのように利用していくのかをマオリの人々と真剣に話し合う必要がある。

私が伝えたいことは、伝統的知識の重要性である。自分たちの子供をアイヌ文化の中で育てることにより、伝統的な知識の体系が多くの人に伝わり保持されていく。私は自治体の立場だが、政府側としてもそれを理解しながら一緒に歩みを進めることが大事である。

(平井室長)

民族共生象徴空間(象徴空間)は、アイヌ文化の復興等に関するナショナルセンターとして、アイヌ文化復興・創造の拠点、国民の理解を深めるための拠点など、複合的な意義・目的を有する空間として、北海道白老町のポロト湖畔に2020年4月24日にオープン予定である。現在、その主要施設として、国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園、慰霊施設の整備を進めている。象徴空間には、日本国内のみならず海外からも多くの方々に訪れてもらい、年間100万人の来場者を目指している。

アイヌの言語・文化の復興に関する取組について、ニュージーランドの取組なども参考にしながら、今後もいろいろな機会を通じて国民全体がその価値を認識することができるように国民理解の促進を図っていきたい。

(北原准教授)

アイヌの言葉・文化は、約150年前から始まった北海道への本州からの大量の入植者によってアイヌは少数者になり衰退していった。アイヌ語・アイヌ文化を復興するには、現在の文化政策の方針を大きく転換する必要がある。アイヌ語やアイヌ文化が消えないうちにそれを普及するという姿勢から、古い記録の中からアイヌ語・アイヌ文化を掘り起こして、自分たちのものとして取り戻してから普及に取り組んでいく方針に大きく変える段階に来ている。

今のアイヌ民族は日本語を話す者が圧倒的に多く、非アイヌの日本人と同じ生活をしているため、誰がアイヌなのか分からないという状態である。一見同じような暮らしをしていても、そこには違った文化的な背景やプライドの持ち方をしている人々がいるということが見えるようになることが大前提ではないかと考える。

(八幡係長)

アイヌ民族博物館は、アイヌ文化の伝承・保存並びに調査・研究、教育普及事業を総合的に行う社会教育施設で、職員は50名、そのうち約6割がアイヌである。当博物館

では、2013年からルイカ・プロジェクトを発足し、世界に向けてアイヌ文化と地域・人・文化をつなぐプロジェクトを実施している。

「博物館は研究や学んだことを地域や社会に還元する場所」という先輩からの助言のもと、人材育成や普及活動に積極的に関わり、アイヌが主体的に自信を持って様々な活動に携われるようになって欲しいと考えている。博物館は物を展示して情報を一方的に見せるだけではなく、収蔵物や情報を活用して、どういったアイヌ文化活動をしていくかということアイヌだけではなく、アイヌを取り巻く人たちとも一緒に考える場所としたい。これからの子どもたちが「自分はアイヌ」と声を大きくして生きていけるような社会づくりに貢献できるように関わっていきたい。